

終わらない遠近

和合 亮一

えんぴつだけを集めていくと
はるか遠くにある小さな
政府が減びる

新しい
消しゴムを並べていくと
世間が重たくなる

時計を分解すると
はるか遠くの軍隊が整列し
行進している

傷だらけの
ハードカバーの本を開くと
生まれなかった叔父さんが

日光写真を燃やし始める

三角定規に
傷を付けるとはるか
遠くの川が燃えている

青年や聖なる少女たちが
お互いを非抽象的に傷つけ合って
中庭では水たまりが風になびき

すると遠くの
瓶の中の
船は転覆

飴を嘗めているうちにはるか
遠くの学校の窓で蛾が消える
消えていく

大人しいままの
自分の子ども時代がわんわんと泣きながら
卓上でうつ伏せている

卵を割ろうとすればはるか遠くの
病院の屋上で
物干し竿が倒れている

無言のままの

囚人たちは一列になって
作業場へと向かい刑務官は足を攣る

湿布を貼ろうとすると
はるか遠くの海の名前が
変更されている

怒りのおさまらない
銀行員が計算機を故障させながら
シルクロードの地図を破く

牛乳を沸かしはじめると
はるか遠くの砂浜で新しい種の蟹が
まっすぐに歩いている

自動販売機が

自動販売機の隣で
釣り銭切れになっている

髪を梳かそうとすると
はるか遠くの階段の踊り場で
甲虫が羽根を広げようとしている

色を塗り終えた漁船は
水に浮かべられたままで
波の皮肉を待っている

(何かが終わらない

何かが始まらない

遠くで 近くで)

岬が灯台の明かりをこちらへ投げている
先には無人の国が広がっている
にわたりの腹の底で割れた森羅万象が蠢いている

何かが終わらない

快晴の日にミンク鯨の内臓が空になっていく
季節の静寂がトウモロコシの
亡霊の中で歯を剥き出して激怒している

何かが始まらない

素足の悲しみだけを
分かっている

死者の横顔は隣だ 近い

薔薇の目と耳と鼻と口の現在に

姿が見えなくなる
狼に育てられた
人間の影は遠い

曇りのない鏡には
膨張する宇宙の摩擦の理由だけが濡れ落ちていて
それが遠い

抽象的な華厳の滝に近い

内なる 秘めた失念は牙を剥き
ほのかに遠い湾岸道路を
猛り狂う

はるか遠く 狼の冷え切った
前足がどうしようもなく怒りを
駆らせている

家の前の道の真ん中に片足だけのビーチサンダル
それが転がっている
ダイズムが燃えている

遠くに目を細めてごらん
心を裏側から金槌で打ち砕くように
心の裏側を金槌で打ち砕くの

粉々になるのだ
うらむべきは心の
主なのだ

輝く夜明けと共に
新しいチューインガムを

ぶち壊したいから嘔む

愛が宇宙を殺して

反吐を吐くから

黒海の深海でホオジロザメが記憶を失う

何かが終わらない

何かが始まらない

遠くで近くで

静かに広大な夢が押し黙っている

何かが終わらない何かが始まらない

静かに比類ない残虐が嘲笑っている

何かが終わらない何かが始まらない

静かに吹きすさぶ風が裏切っている

何かが終わらない何かが始まらない

静かに散りつづけているハナミズキがある

何かが終わらない何かが始まらない

静かに湧きたち消える雲の解散がある

何かが終わらない何かが始まらない

静かに眩きをとめない雀の大きな翼がある

何かが終わらない何かが始まらない

静かに波浪を繰り返して消えていく大海がある

何かが終わらない何かが始まらない

静かに麦の慚愧を発酵させたウイスキーの一滴がある

何かが終わらない何かが始まらない

静かに誰にも愛されない小高い丘の一本杉がある

何かが終わらない

何かが始まらない

遠くで近くで

遠近は狂ったまま

何かが終わらない

何かが始まらない